
さくらの木

上村忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さくらの木

【Nコード】

N73770

【作者名】

上村忍

【あらすじ】

ぞわっとする話をぜひ。

(前書き)

現実とネットの世界は紙一重

はじめまして。トピ立て失礼します。

なんかみなさんすっごく怖い話書かれてて、すごいですね。

私は、あんまりこういうのに書くの慣れてないんで、何か不適切なところがあったら、管理人さん、削除してください。

私が経験した怖い話なんですが、あれは大学1年のときでした。

確か、桜の咲く季節でした。

私は、近所の居酒屋でバイトをしてて、あの日も、12時まで店で、それから片付けしてたので1時くらいだったと思います。

私は、自転車でバイト先まで通ってました。近所だったので15分くらい。帰り道に、大きな桜の木がありました。八目桜だか、ソメイヨシノだか（私はくわしくありません）、でも、とってもきれいな桜です。

夜中だったので、夜桜っていうんですか？電柱の光に照らされて、なんだか、「色っぽいな」と思ったことを覚えています。けど、昔から、夜桜は血をすって赤くなるっていいますよね。それを信じてしまうような、きれいな色の桜でした。

居酒屋からの帰り道、墓場の横を通ります。私の家は、墓場の横にあったのです。マンションなんですけど、自分の部屋からは墓場が一望できました。悲しいけれど、本当なんです。だから、墓場は慣れっこだったんですが、やっぱり夜中に帰るのは少し怖かったです。いつも、自転車のスピードをあげて、ウォークマン（当時はMDが主流でした）もノリのいい曲をガンガンかけて、帰ってました。

けど、その日、なんだか桜がとってもきれいで、自転車を止めてしまいました。桜の木の下に、自転車を置いて、桜の木を見上げました。月が遠くの空に見えました。桜の花びらがチラホラと落ちて、すごくきれいでした。

うつとりしながら、眺めていると、ふと気づきました。ウォークマンの音の中に、笑い声が聞こえるのです。

「あはははっ」って感じじゃなくて、「うふふふっ」って感じ。

そのときの曲はモンゴル800だったか、ハイスタだったか忘れましたが、ノリノリの曲です。そんなSEが入ってる訳ありません。

気付かなければ良かったのですが、一度気になるとまりません。私は、怖くなって自転車に飛び乗りました。ウォークマンの音量も最大まであげました。もし、どこから笑い声が聞こえたとしたら、これで聞こえなくなるはずですよ。曲の中の音なら、笑い声も大きくなるはずですよ。

でも、笑い声は、さっきのまま、ずっと同じように聞こえました。しかも、なんだか、笑い声が近づいているように聞こえるのです。

自転車に乗りながら、首、をグツとつかまれそうなの、そんな感じがしました。

もう本当に怖くて、自転車を必死になってこぎました。とまったら、引っ張られるような気がして。

家について、自転車のかぎもかけずに放り投げ、玄関に走りました。私の家はマンションなので、オートロックが1階についています。

かぎを出す手も震えました。後ろに気配は感じますが、振り返ることなんてできませんでした。

かぎを開け、エレベーターに飛び乗りました。エレベーターが閉まる瞬間、その気配は消えました。

これが、僕の経験した怖い話です。

と、そこまで書いて、陽一はPCの電源を切った。暑い夏なので、怪談の一つや二つ、トピ立てしても大丈夫だろう。

確かにあの時は怖かったなあ。ちょっと作ったところもあるが、まあまあリアリティのある話だろう。

陽一は、あと一日しかないお盆休みを満喫すべく、シャワーを浴びることにした。

シャワーを浴びていると、頭を洗っている最中に突然水が止まった。泡がいっぱいついている状態だったので、目も開けられない。手探りで蛇口をひねったりしてみるが、変わらない。

そうしているうちに、なんだか、笑い声が耳につくような気がした。うふふふ。

陽一は背筋をゾクツとさせながら、そのまま風呂から出て、タオル

で顔をぬぐった。いつもとかわらない景色、笑い声もう消えていた。

洗面台の蛇口をひねると、水が出たので、頭を洗いなおした。

その後、風呂場の蛇口をひねると、普通に水が出たので、

「これで、もう一つくらい怖い話書けるかもな」くらいに思うことにした。

今日も暑い、友人と昼間からビアガーデンに行くことになっている。

時計を見ると、まだ時間があつたので、さっきの話に追加することにした。PCを起動させる。

さっきのトピ立てから10分、書き込みが一つあつた。

はじめまして。私は、ケイコといいます。

私も同じような話、聞いたことがあります。

都市伝説みたいなものなんでしょうか？

でも、私の知ってる話には、続きがあるんですよ。

なんか、その後に、急にシャワーとか水が止まったりするって。

他にもいろんなことが起きるって。

陽一さんは知ってますか？

陽一は、呆然と立ち尽くしてしまった。いやいや、まさかこんなことある訳ない。たちの悪いいたずらだな。こうやって、煽ってるに違いない。書き込みする気にもなれず、陽一は、PCの電源を落とした。

ビアガーデンにはぴったりな日だった。待ち合わせは、12時に地下鉄の改札。昼間からビールが飲める！こんな幸せはあまりないだろう。

時計を見る。12時15分。おっそいなあ！、と一人でつぶやき、携帯をチェックする。ふと、思い立ち、携帯からさっきのトピを見てみた。

どうも、ケイコです。

さっきの話の続きなんですが、思い出したので書き込みます。なんか、シャワーが止まるくらいいいんですが、その後、友人が事故にあったりもしたみたいです。後、食べ物に、やたら髪の毛が入ってたりするみたいです。陽一さんは知ってましたか？

陽一は、携帯を取り落としてしまった。

その瞬間、携帯が鳴った。

着信は友人の携帯からだった。

「陽一さんの携帯ですか？」

「はい、そうですが、って？あれ？誰ですか？」

「私は救急隊員の川島といいます。今、友人が事故にあわれて・・・友人と待ち合わせをしていると聞いたんで電話をしました」

「はあ！？本当ですか？」

「はい、さっきまでは意識があったんですが、今は意識もなくなっ
てしまつて。どうか、高台救急病院まで来てください。」

「わかりました。すぐに行きます」

他にもいろいろと話したが、覚えていない。
頭の中ぐちゃぐちゃで、何も考えることができなかった。

とにかく、救急病院へ急がなくては。

陽一は、タクシーをつかまえ、飛び乗った。

「高台救急病院まで、急いでください」

「わかりました。どうしたんですか？そんなに慌てて。」

「友人が事故にあいまして。意識もなくなったみたいなんですよ」

「そりゃ大変だ。じゃあ、飛ばしますからね。行きますよ！」

グオンとエンジン音を上げて、タクシーは走り出した。

「けど、落ち着いて冷静になることも大事だと思いますよ」

「・・・はあ。そうですね？」

「そうですよ。あなたが慌てても、友人が元気にはなりませんからね。今のあなたのできることをしましょうよ。」

「・・・」

陽一は、黙り込んでしまった。

「元気を出してくださいよ。はい、私の妻が作ってくれたんですが、おにぎり、いかがです？」

運転手は、笑顔で、信号待ちの時に振り返り、アルミホイルにくるまれたおにぎりを出してきた。

陽一はお腹なんてすいていなかったが、思わず手を出してしまった。
運転手はニコニコしながら、こちらを見ている。食べないわけには、
いかなさそうだ。

「じゃあ、すいません、いただきます・・・」

食べようとした瞬間に、ふと思い出した。

「後、食べ物に、やたら髪の毛が入ってたりするみたいです。」

さっきの書き込みにはそうあった。いや、まさか、そんなことあるわけがない。

恐ろしくなった陽一は、おにぎりを口に入れず、割ってみることにした。運転手は、運転するために前を向きなおしている。

割ってみると、おにぎりの本来具が入っているところに、髪の毛のかたまりがはいっている。あきらかに、普通のおにぎりではない。

陽一はガクガクと震えながら、携帯を取り出した。震える指で、トピックをチェックする。

そこには、

「このトピックは削除されました」

という文字が。

運転手が声をかける。

「あ、お客さん。おにぎりどうでしたか？ちなみにね、私の妻、ケイコっていうんですよ」

振り返った運転手は、笑ってはいなかった。

そして、陽一は、フロントガラスの先の木を見た。
その瞬間が、陽一の最後の瞬間だった。

次の日の新聞には、タクシーが、木に突っ込み、乗客は死亡。
不思議なことに、運転手はなく、死亡者は一名だけだったと書かれていた。

突っ込んだ木が、桜の木だとは書かれてはいなかったが。

(後書き)

さくらの木、
桜の木、

怖いのはどちらだろう？僕はさくらの木の方が怖いが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7377o/>

さくらの木

2010年11月8日08時32分発行